

『福田恆存を読む會』：テキスト

図を含めてこのテキストが呑み込めると、「福田恆存」「DH ロレンス」のおほかたが理解できるのではなからうか、と小生は思ふのではありますが・・・。

《各時代的分類他：構図》

当構図は吉野発表、或は意見開陳の際に殆ど必要となります為、『読む会』ご出席時はお手数とは存じますが、ご持参の程お願い申し上げます。

福田思想を学ぶ際、なるべく視覚化した方が、会員相互の理解に繋がり得るのではなからうかと、仮に「テキスト」として、たたき台的に使用を試みました。

図解は未だ吉野の「仮説」的段階であります。今後会員各位の討論を経て、福田恆存理解の「テキスト」として客体化され、当会の活用に供し得れば、更なる幸せと存ずる次第であります。

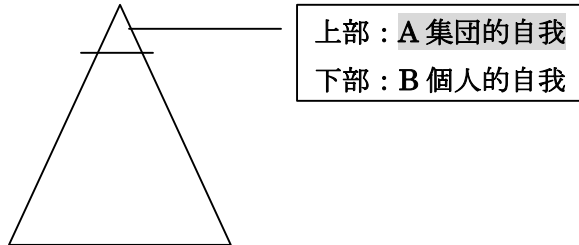
注：《テキスト活用に際しての分類及び略号化》は「P 3」に在中

《目次》

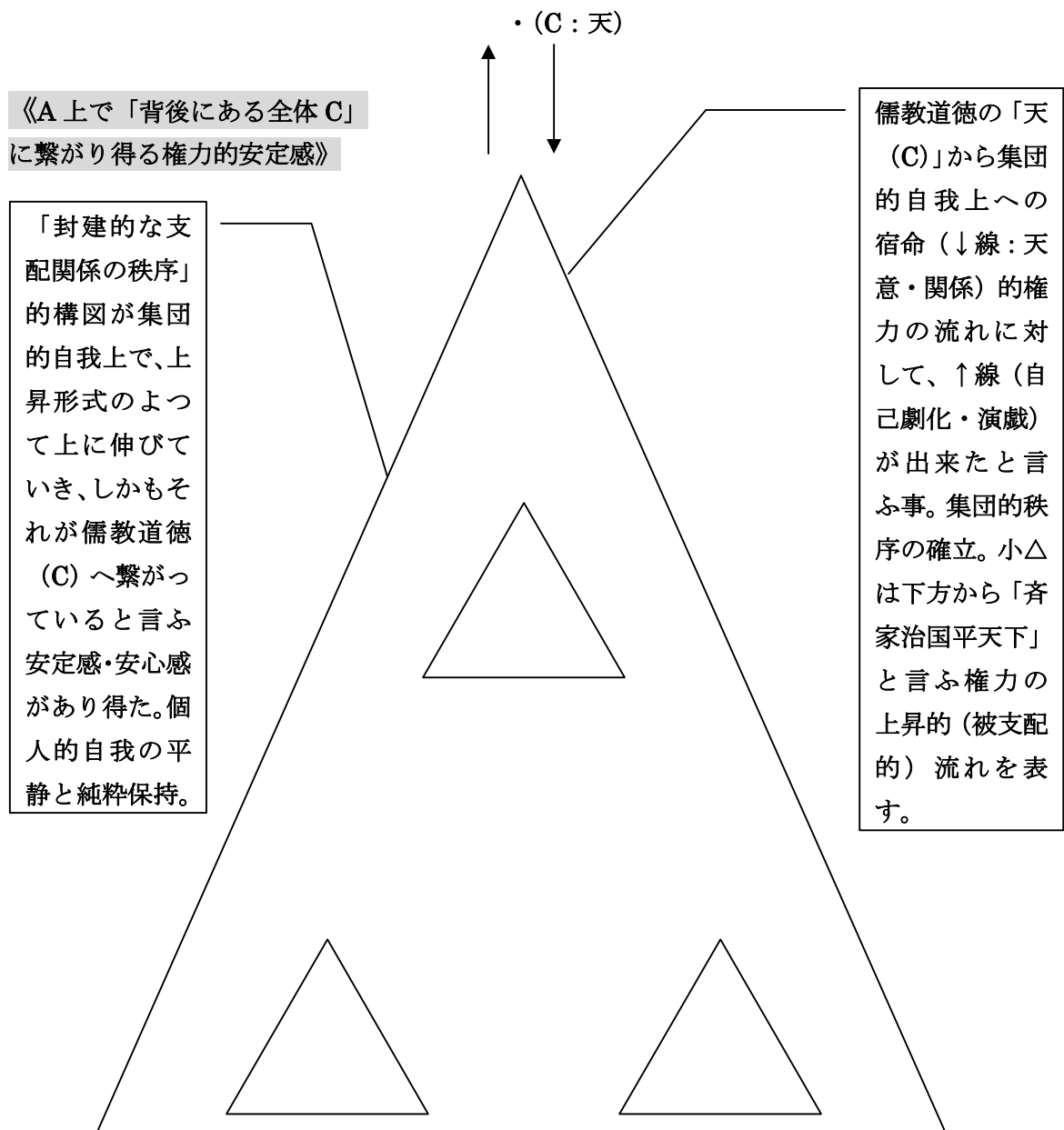
- P 1. 【前近代（封建制度時代を含む）：精神（B）主義構図】
- P2～9. 「西欧歴史的統一性：図解」
- P 1 0 「完成せる統一体としての人格」図
- P 1 1. 「演劇における関係の真実化」（「完成せる統一体」的演戯）図
- P 1 2. 《言葉（観念）の自己所有化》図
- P 1 3. 《個人主義の構図》（個人主義：自己全体化・自己主人公化）

【前近代（封建制度時代を含む）：精神（B）主義構図】例：江戸時代

（職業は「支配・被支配の自己」の安定（有機的権力の流れ）の中で、縦と横との関連が実感（D3 実在感）され、権力欲の対立は解消せしめられてゐた）



以下は、上図「A：集团的自我」部分の拡大図：前近代（精神主義）の中でも息づく「支配・被支配の自己」と言ふ有機的な権力の流れ



「西欧歴史的統一性：図解」【近代の宿命】（全集第二巻）から。

A(「支配＝被支配の自己」)・B(神に従属する自己) 二元論の歴史的展開

「歴史を持つ社会は、自ら回復しえぬやうな病ひをけつして背負ひこまない。歴史の意識をヨーロッパにはじめて植ゑつけたものが中世であり、その基督教にほかならなかつた。ギリシャに歴史はない。——絶対者のないところに歴史はありえないのである。統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を付与する。(即ち以下の構図の変遷)とすれば、ぼくたち日本人がヨーロッパに羨望するものこそ、ほかならぬ近代日本における歴史性の欠如以外のなにものであらうか」(全二 P460)：括弧内は吉野挿入

「統一性と一貫性」・・・とは、下図における三角図と C(神・絶対)の不動と言ふ事。そして AB 分離線の下降(変遷)のみがあつたといふ事に、その歴史性(統一性と一貫性)の存在が証明されてゐると言ふことである。

《以下、テキスト活用の際しての分類及び略号化》・・・恆存の「二元論」的捉へ方。

「支配＝被支配の自己」・集团的自我・「九十九匹」・実生活・政治・・・・・・・・・・ A
神に従属する自己・個人の純粋性・個人的自我・「一匹」・芸術・文学・・・・・・・・・・ B
全体・絶対・神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ C
場(場面)・自己完成・自己全体化・自己主人公化・個人主義化・・・・・・・・・・ C”
詩神(自己への肯定因。「C”：自己完成」の後盾・自家撞着として)・・・・・・・・・・ C2
関係・宿命・神意・天命・秩序・文化・・・・・・・・・・・・・・・・・・ D 1
自己劇化(附き合ひ方)・演戯・自由意志・自己主張・信仰・・・・・・・・・・ D 2
実在感・必然感・全体感・生き甲斐・充実感・・・・・・・・・・・・・・・・・・ D 3
言葉と話し手との間の距離(把握手段：フレイジング・So called)・・・・・・・・・・ E
注：(Eの至大化＝D1の至大化＝適応正常)
言葉・・ F

参考文献：「すすんで他とかかはりあひ、他を支配したり他に支配されたりすることをとほして自己を生かさうとする集团的自我(A)」と「おのれを完成せしめんとする個人的自我(B)」
(特に留意して戴きたいのは、以下三角図に於いて「AB」上下の分離線が、中世以後十九世紀に近づけば近づく程下降して行くと云ふ点です)

《一流(聖人賢者)と絶対・全体との関係》以下()内は吉野注

・・・神にのみ従属する自己(B:個人の純粋性・個人的自我)と「C:絶対・神・全体」とは一対一。(「支配＝被支配の自己」・集团的自我の不要)
イエス・レオナルドダビンチ(そして氏の願望の中にも。たしかある

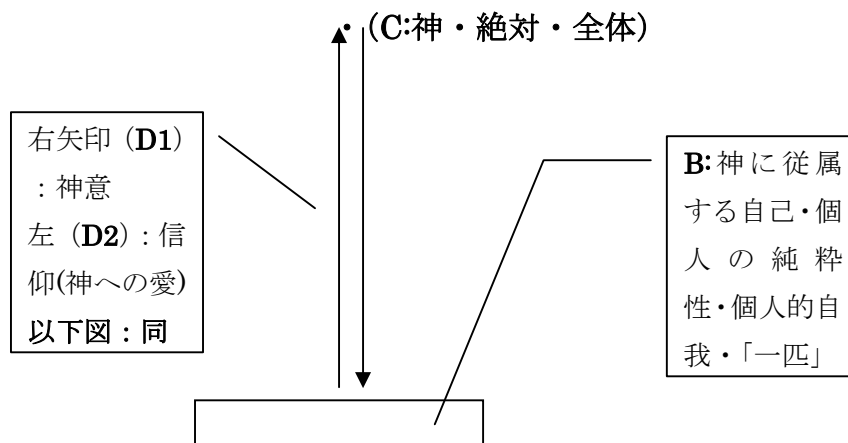
評論にその事が)

イエス・・・「神と二人きりでゐるかれ（イエス）にはもはや政治（支配＝被支配の自己・集団的自我）すら不要であつた」全集：P 4 4 1

ダビンチ・・・「かれ（レオナルド）は自然（全体）と二人きりで存在する」「かれにおいて神に従属する自己は、すでに神の支配下を脱し、おのずから個人の純粋性それ自体にまで昇華せんとする」

「イエスは——いや、イエスのみならず、多くの聖人賢者たちは、つねに個人であつた。純粋なる個人（B）にとどまつてゐた。イエスは弟子たちのまへにも、つねに孤独であり、かれらの肉体的権力者（A:「支配＝被支配の自己」）となることをかたく拒絶してゐた」

《一流（聖人賢者）と絶対・全体との関係》の構図

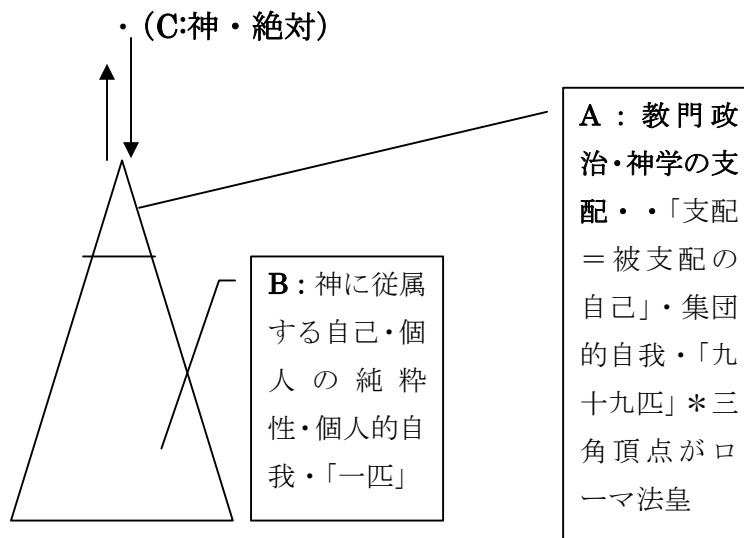


《中世》・・・精神主義（B主義）

「パウロ以来のキリスト教神学といふものはイエスの無責任な、にもかかはらず偉大な放言の尻拭ひのために生れてたものにほかなるまい」

「そこでイエスと自分たちとのあひだに横たはるどうしようもない越えがたき溝を埋めんがために、神学の完成をめざした。（中略）中世の偉業といふものが考へられるならば、それはまさしくこの点」 p 93

《中世》・・・精神主義（B主義）

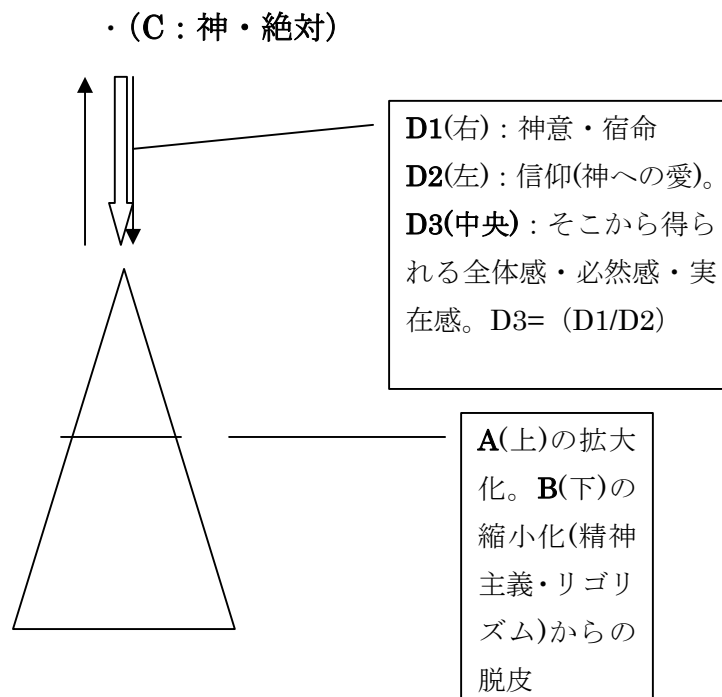


[中世における、キリスト教の精神主義・厳格主義(リゴリズム)]・・・

「支配＝被支配の自己 (A)」に対する教会の徹底管理 (教門政治)。

『肉 (A的: 吉野注) に従ふは罪。肉は神意の遂げ処。性愛は神の象りである人間を生み増やす手段』 (カトリシズム)

《ルネサンス》・・・中世一神＝ルネサンス（英思想家：ジルソンの言）



中世が過ぎ、神(C)が幾分希薄になった分だけ、「支配＝被支配の自己(A)」・集团的自我・「九十九匹」の領域の拡大化。

「肉に従うは罪」(中世) → 肉体性の主張(ルネサンス)への変化：その時代的現象化としてシェークスピアのロマンティックコメディ。

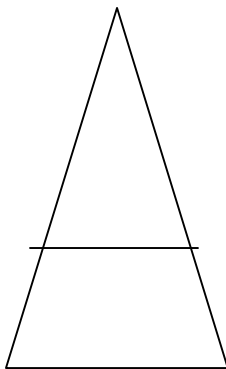
備考：宗教改革(十六世紀)・・・「ヨーロッパの資本主義を発展せしめた社会的主体は宗教改革の神に導かれてゐた」P463：参照『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(マックス・ウェーヴァー)

~~~~~

《十八世紀》・・・更に神は希薄に。(分離線：「精神の政治学」線の下降化)

・ (C)

・ (C'') ← 前面に「自己全体化・自己主人公化・個人主義」の設定



「十八世紀が楽天主義の時代に見えるのは、個人の純粋性 (B) と「支配＝被支配の自己」 (A) とのあいだの調和に合理化がおこなわれうると信じてみたためであつた。・・・いはば、個人と社会との対立は社会の側から解決されるといふのである。・・・ただ時が、文明の進歩がこれを解決するであらう——十八世紀が希望に満ちた楽天思想に蔽われたのも当然である」 P 5 4 8

〔更に神は希薄に〕・・・上記 (C) との間に (C'')：自己全体化・自己主人公化・個人主義) が設定される。

\* フランス大革命・・・国家のカトリックからの脱皮(政教分離)

\* 英国は既にヘンリー八世 (ルネサンス初期：エリザベス女王の父) の時にそれを実現。「英国国教」設立 (1534 年) により国教法王の上に国王を位置。  
＝近代国家の成立。

注 《精神の政治学とは》・・・

「精神の政治学とは個人の純粋性と『支配＝被支配の自己』とのあひだに、それぞれの個性に応じた均衡を企てるものであるゆえに、もし社会 (A) が自然のごとき合理性をもつてゐるならば、もはや政治学の用はなく科学がそれに代

るべきである」(全2:P451『近代の宿命』)・・・

とは「社会(A)が合理性をもつてゐる」なら、科学で九十九匹(A)の問題はけりがつき、「均衡」は不要となりBの領域は消える。と言ふことだらう。十八世紀の楽天的「合理主義・科学主義」はそれを素朴に信じられてゐた時代。「いはば、個人と社会との対立は社会の側から解決されると」

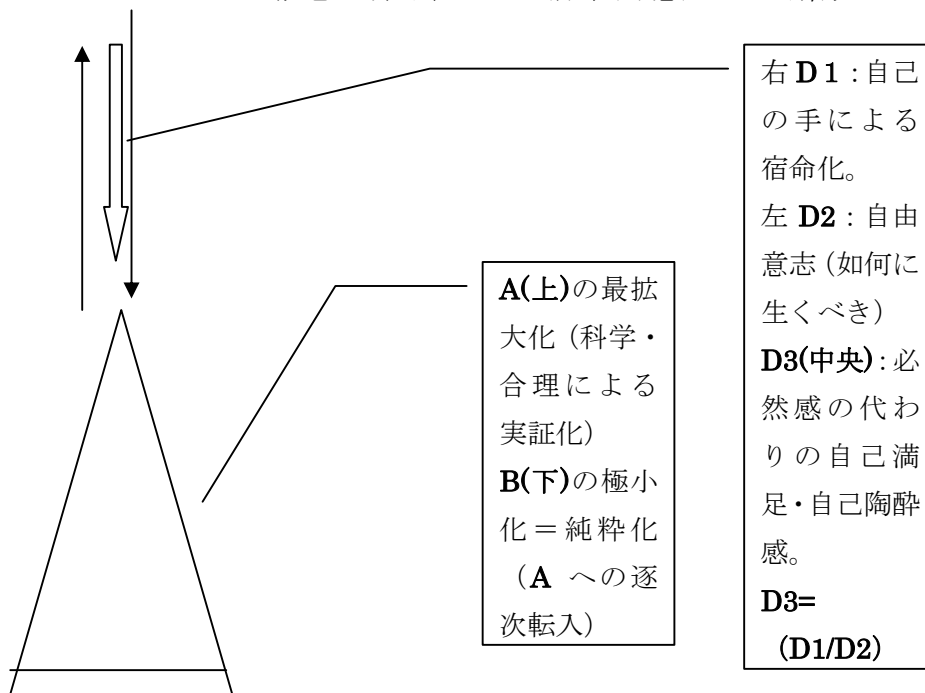
\*\*\*\*\*

甲図【西欧十九世紀構図】・・・分離線の最下降

《十九世紀》近代自我：個人主義と言ふ名の「動きまはる影・あはれな役者(マクベス)」

・(C)・・・神(主人公)は背景へと遠ざかる。宿命(神意)からの解放。

・(C'') 個人主義(自己主人公化・自己全体化：神に型どれる人間の概念の探求)・・・宿命(神意)からの解放



「十八世紀が楽天主義の時代に見えるのは、個人の純粹性と「支配＝被支配の自己」とのあいだの調和に合理化がおこなわれうると信じてゐたためであつた。十九世紀においてはその信仰が失はれてしまつた」

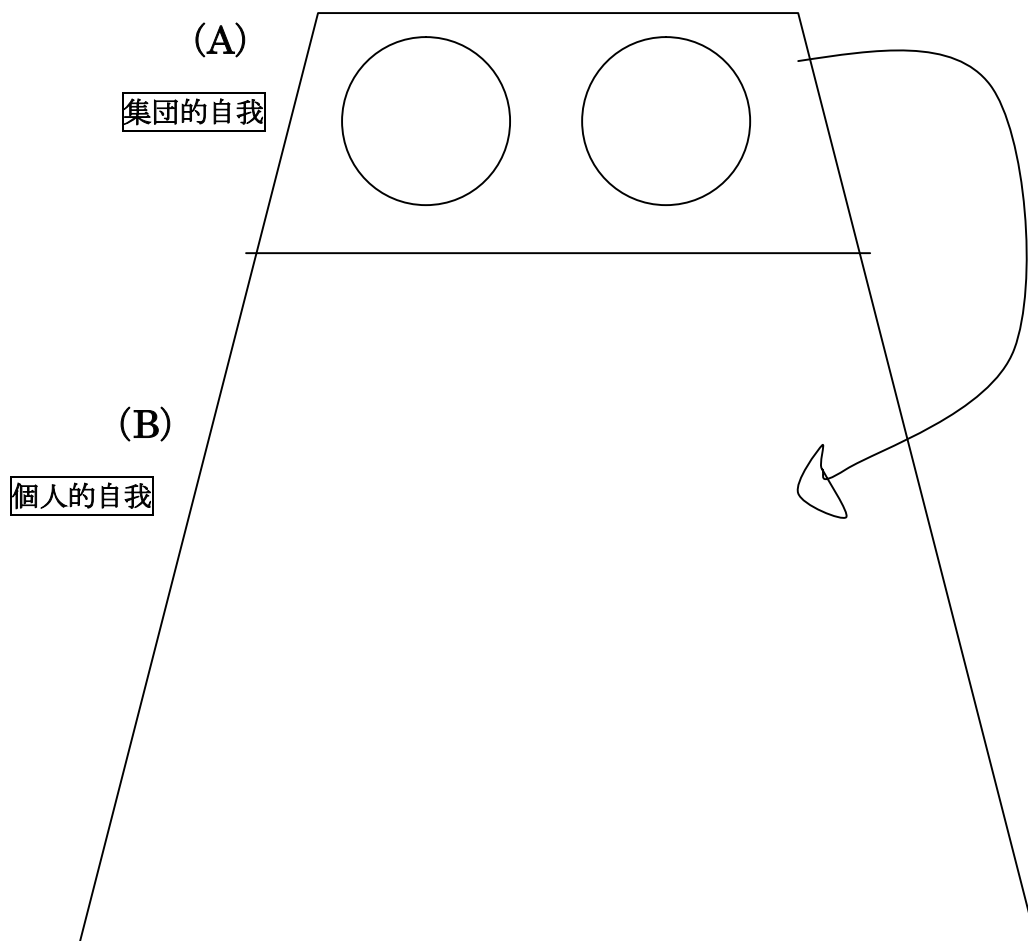


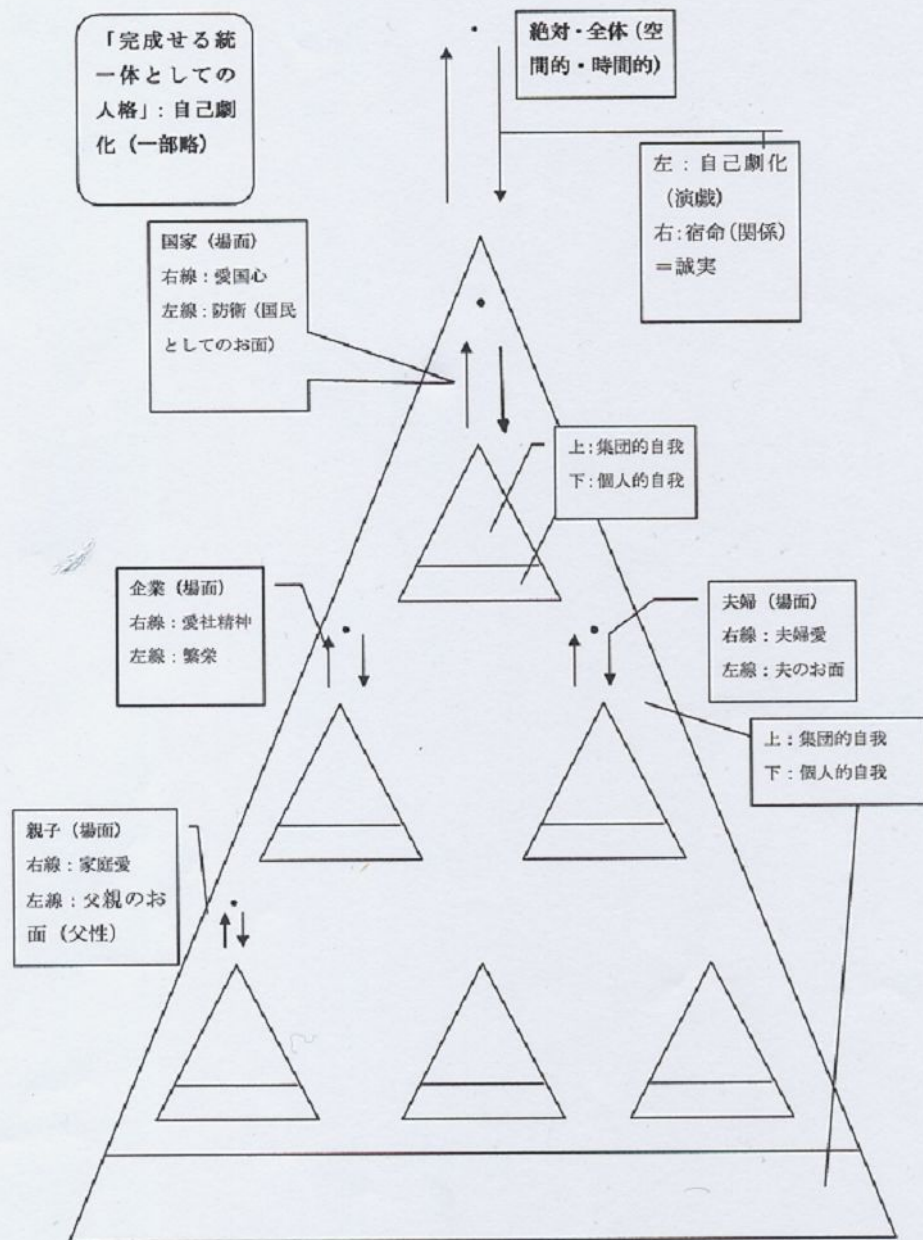
乙図：日本の精神 (B) 主義構図 (非近代)・・・「相対主義の泥沼」

下図説明《上部分 A：集団的自我。下部分 B：個人的自我》\*上 (Aの領域) の○二つは左が社会 (客体) 右が自己 (主体)。その二者が離れてゐる、即ち不満足 (非客対化) 的状态。そこから B (文学・芸術・宗教) への逃げ込みが始まる。・・・「弱者の歪曲された優越意思」(ロレンス) と言ふ、洋の東西を問はぬ人間が持つ普遍的な劣勢心理。\*「文学 (B：下部分) すらも文明開化の出世主義 (A：上部分) のネガティブな吐け口になつてゐた」。故に、二つの○が交錯する満足状態になれば、救ひとして求めた B は不要となり、A 満足 of 幸福に浸る。その意味で、「ぼくたち (日本人) のうちに政治 (A：支配=被支配の自己) では救ひえぬどんな苦悩が存在してゐるといふのか」と言ふことになるのである。元々 B (文学・芸術・宗教) への救出願望そのものが不純なるが故に。

C2 (詩神) は自己への肯定因。「C”：自己完成」の後盾・自家撞着として。⇒  
 =====⇒・C” (自己完成)

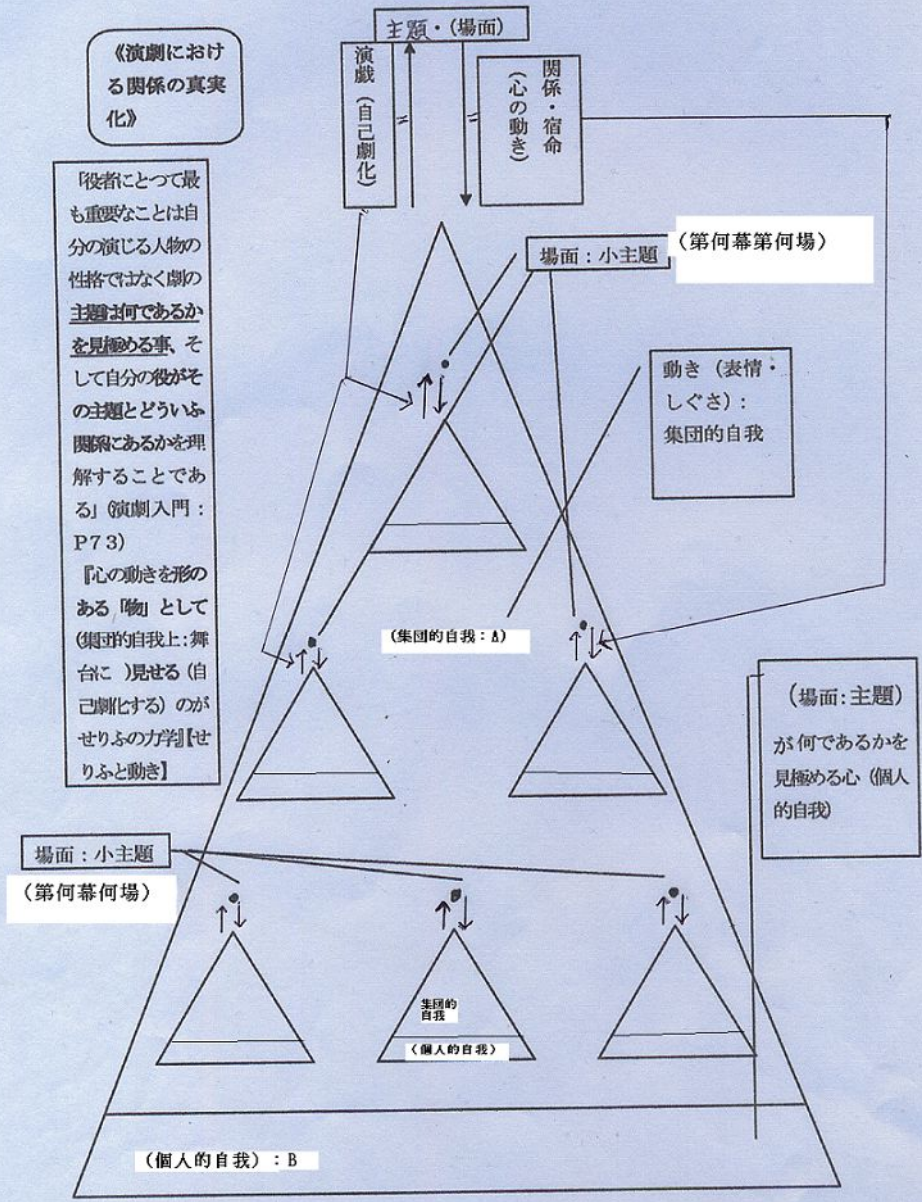
左矢印：(自己拡大欲 D2)  
 中央矢印：「自尊と自己正当化」  
 「似非実在感 (D3)」  
 右矢印 (D1：自分で自分に作る宿命)



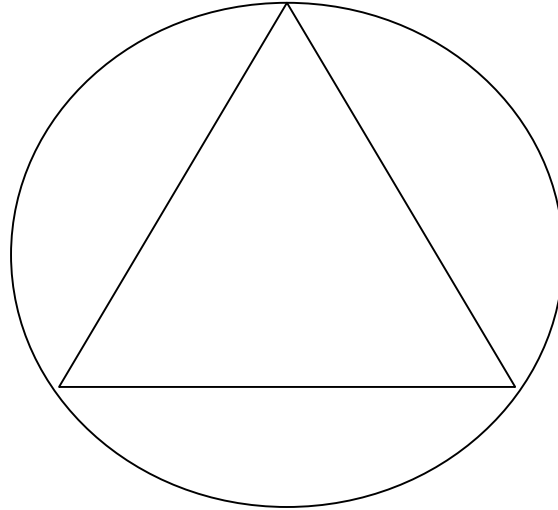


《演劇における関係の真実化》

「役者にとって最も重要なことは自分の演じる人物の性格ではなく劇の主題は何であるかを見極める事、そして自分の役がその主題とどういった関係にあるかを理解することである」(演劇入門：P73)  
『心の動きを形のある「物」として(集団的自我上：舞台に)見せる(自己劇化する)のがせりふの力学【せりふと動き】』



《言葉（観念）に呑み込まれてゐる場合＝適応異常》・・・○＝言葉 △＝自己



《言葉（観念）の自己所有化》

・場面：近代（西欧）

左上線「なぜ」：近代化（関係）D1

左下線：言葉と自己との距離（なぜ/何の方法論）

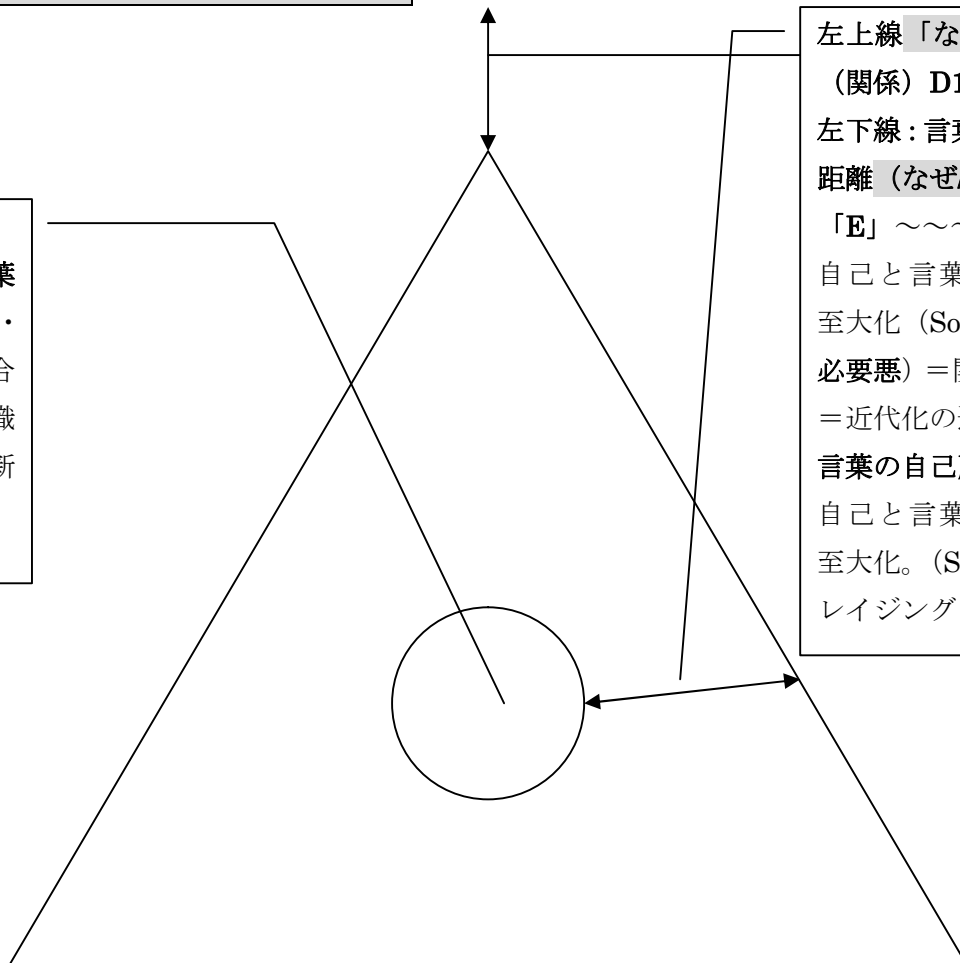
「E」~~~~~

自己と言葉との距離の至大化（So called 化：必要悪）＝関係の至大化＝近代化の適応正常。

言葉の自己所有化とは、自己と言葉との距離の至大化。（So called・フレイジングによる）

「何」：F

せりふ・言葉（観念）・・・  
「機械化・合理化・組織化」等々・新漢語



# 《個人主義の構図》

(観念上の絶対・全体)・(不在)

